ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第348回

彦根藩佐野領の松茸

松茸は秋の味覚の代表格と言っても過言ではないでしょう。江戸時代においては、現在ほど高級食材ではなかったようですが、やはり秋になると盛んに贈答されていました。

彦根藩では、藩領内の里根山（彦根市里根町）などで松茸が採れました。秋になると藩主が松茸狩りに出かけ、数百本、時に数千本も採れた松茸を家族や家臣に贈っていたことが、藩主の側近くに仕えた側役の業務日誌である「側役日記」（彦根藩井伊家文書）などからわかっています。

彦根藩でやり取りされた松茸は、近江国内産だけでなく、彦根藩の飛び地である下野国佐野（現栃木県佐野市）のものもありました。佐野領には御林山と呼ばれる藩が管理する山があり、ここで松茸が採れました。佐野の松茸はどのように利用されたのでしょうか。

写真の史料は、弘化二年（一八四五）から安政元年（一八五四）までの佐野松茸の送り先の記録です。これによると、まず「御屋敷納」として、藩の屋敷へ納める分がありました。作柄によるのか、多い年で千二百六十本、少ない年で三百四十本でした。

ほかに、藩から音信（進物）や下賜品として送る先が挙げられています。日光南照院（栃木県日光市）へ五十本、中田御関所（茨城県古河市）へ百本、中田宿本陣（同前）へ五十本などです。南照院は日光東照宮の宿坊で、彦根藩主が日光へ将軍の名代として参詣する際に宿泊した場所です。中田御関所と中田宿本陣は江戸から佐野へ通じる街道上の関所と宿場で、佐野領との行き来の際に世話になっていた所です。

その他、佐野にいて諸役に就いていた足軽らにも下賜されていました。足軽小頭（足軽組内の統制役）二人へ十本ずつ、物書役へ七本、物書見習・手伝へ五本ずつ、御陣屋守と松茸送り役へ五本ずつ、それぞれ下賜されることになっていました。

ただし、これらは佐野で採れた松茸の全てではないようです。佐野代官の業務日誌「御用日記」（彦根藩井伊家文書）の文化十一年（一八一四）八月十八日条によると、この時松茸一万五千四十九本が採れ、このうち千百二十本が「御上り」（藩主のいる江戸屋敷へ送る分と見られる）、南照院へ五十本、などとされています。この史料には残りの約一万三千七百本分の扱いが記載されていませんが、どこかへ送られたか、或いは売却されたと思われます。先に見た弘化～安政期頃も、これと似た状況だったのでしょう。

また、本数は不明ながら、江戸屋敷を経由して彦根へも送られていました。「側役日記」明和五年（一七六八）九月十五日条に「佐野の松茸を送るよう命じる書状を、飛脚で江戸に送るよう用人の三浦へ依頼した」とあります。また、同七年九月十三日条には「佐野の松茸が送られてきた」「今年は彦根から依頼していないが、例年通り送られた」とあり、毎年送られていたと考えられます。これは先に見た「御屋敷納」「御上り」の内である可能性があります。

佐野の松茸は、佐野に近い地域での贈答にも使われたのに加え、藩の江戸屋敷へ送られ、さらに国元彦根へも送られていました。佐野の松茸は、江戸や彦根でも秋の風物詩となっていたのです。

【彦根城博物館学芸員　荒田雄市】

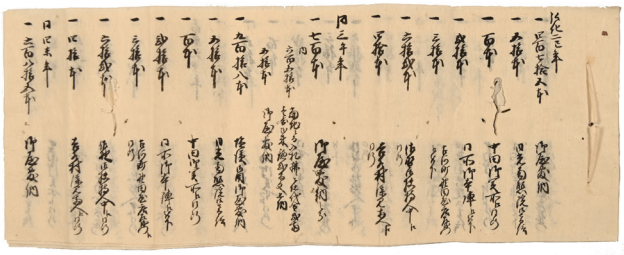

写真　佐野松茸納め調書
（彦根藩大久保家文書、当館蔵）